

第十七回

遊び——目的を超えるもの

びさいの卒園生が、陸上競技で市囚では一位、県でも有数のランナーがいると聞いて、大変ほろろしく思いました。ある時、そのお父さまはぼったの出会ったので、たずねてみました。「たぶん練習してると思うが」と。そしたら、部活動を始めたのは五年生になった今年からだという。大会に近くなったら選抜されて練習した位の子で、「それなら何か運動してるんですか」「たずねると、お父さまいわく「外遊び」です」とのこと。おー！なんと「外遊びですか！」と感嘆すると「ケートロばっかやってます」だって。すばらしい！

遊びの力だ！ 遊びの力、その広さ・深さ、つまり遊びの豊かさを美証するよいな、びさいにとってまことにありがたい実例です。

子どもの体力づくりは大切です。びさいでも、子どもの体が目覚めるような幼児教育をしたいと思っていますが、まだまだです。雑巾がけや、年中組がフェスティバルである「体操劇」にちょっと実現できているくらいです。文科省は「毎日60分以上体を動かす」という「幼児期運動指針」なるものを作りました。

ただ、体力向上をいっしょに、すべ大人は、毎日園庭を10分一斉に歩くことが、5周ひまわりをいっしょに「体育」の授業的な発想をいっしょにしています。しかし先の文科省からの呼びかけでも「遊びを中心に楽しく体を動かす」と言われています。また以前からある研究では、特定の運動をするよりも遊びによって楽しみながら色々な動きをする方が運動効果が高いと指摘されています。



ます。なので、びさいでは「一斉マラソン」みたいなことはある気がありません。スライミングスクールやサッカー教室等のスポーツによって体力向上をはかるといっても、大人の普通の発想です。悪いことではありません。目的がはきまわります。当然、目的としてならったものは達成されます。

ただ、目的という発想の限界は、目的としてほられて、目的以外の成果が目に入りこんでくるのです。それに対して遊びは縦横無尽。成果がどこに何こいつ出ているのか、はかりきれない。

目的はただとさえいえば山頂。山頂という点に向かっ登って行きます。目的のこの点は努力を生みます。しかし、山頂はそこについて見れば本当は点ではない、空に近いところ、そこへの登り手は野すべを包みこむ。

幼稚園で積み木で遊んだことが、指折の数えて俳句を詠ったことが、泥んこまみれで遊んだことが、木登りしたことが、いろいろな形で実を結んで花を咲かせるかなんてわからない。幼児教育は、すべてが役に立つようなせつかなな効能ばかり求めるのではなく、遊びを豊かにして「後伸び」を求めるのであり、それが幼児教育の独自性でもあつかの間の「いっしょ」でもあるのです。

目的は大切です。目的を持たず、だからという意味もなぐ日々を送るのはよくない。目的は人を向上させる。しかし、目的を超えた時、人は自由になる。

遊びとは、目的の深い水源から自由を汲んでいくことなみのです。それで、美哉幼稚園は「遊びの学校」をめざすのです。





一学期も
色々なことが
ありました



